

ニホンナシ溶液受粉マニュアル

ニホンナシの多くの品種は自家不和合性で、受粉の良否が収量や品質に直接影響するため、人工受粉は経済栽培上欠かすことができない作業となっています。しかし、受粉作業の期間は短く集中するため、多大な労働力の確保が必要となります。

そこで、受粉作業を省力化できる溶液受粉技術について検討し、「幸水」では実用的な結実率が得られることを明らかにしました。

溶液受粉技術は、花粉を懸濁した溶液を柱頭に散布することで受粉を行うものです。このため、梵天を使用する通常の人工受粉とは花粉の取り扱いなどが異なり、注意が必要です。

なお、「幸水」以外の品種では、十分な結実を得られない可能性があります。また、「幸水」でも、全ての栽培条件で利用できるわけではありません。導入にあたっては、小規模で試してみるなど事前に検討を十分行って下さい。

本マニュアルでは、ニホンナシ「幸水」における溶液受粉の方法や受粉に際して注意していただきたいことを、分かり易く取りまとめました。生産者の皆さんの参考となれば幸いです。



準備するもの

1. 花粉（精製花粉の場合、10a当たり30g～50g程度）

○「幸水」と交配親和性のある品種の花粉を用いて下さい(表1)。なお、ニホンナシの人工受粉用として市販されている花粉の多くは「幸水」と親和性があり、利用可能です。

表1「幸水」との交配親和性の有無

受粉可能な品種	二十世紀、豊水、あきづき、長十郎、おさゴールド、あきあかり、秋麗、なつしずく、筑水、新高、晩三吉、新興、にっこり、南水、新甘泉 等
受粉しても結実しない品種	新水、王秋、秀玉、八幸、多摩、愛甘水、秋栄 等

○粗花粉には葯殻、花糸などが含まれているため、そのまま使用するとスプレーが詰まりますので、よく精製された花粉を使用して下さい。

○花粉の精製には有機溶媒を使用しますので、お近くの普及所等に相談して下さい。

○粗花粉の精製が難しい場合は、販売されている精製花粉(純花粉、写真1)を利用することができます。お近くのJAまたは日園連(業務部資材課:03-5492-5422)にお問い合わせ下さい



写真1 市販されている輸入花粉

2. 花粉を混和する溶液(液体増量剤)(10a当たり10L程度)

○ニホンナシ用の液体増量剤は市販されていませんので、「**液体増量剤の作り方**」にしたがい作成して下さい(現在、水に溶かすだけでニホンナシ用の液体増量剤を作成できる粉末タイプの資材を開発中です)。

3. スプレー

○写真2のような市販のスプレーが使用できます。吐出範囲が狭い方が、花粉を節約できます。

○蓄圧式のスプレーは圧力が花粉に悪影響を及ぼす可能性がありますので、使用に当たっては予め花粉発芽に与える影響について確認してからご使用下さい。



写真2 ハンドスプレーの例

4. その他

○花粉を溶液に混ぜるための容器(ペットボトル等)

○花粉等を計量するための秤

溶液受粉作業の流れ

1. 花粉・液体増量剤を準備します。

➡ 詳細は「**液体増量剤の作り方**」及び「**花粉の希釈**」をご覧ください。

2. 溶液に花粉を入れ懸濁します。

➡ 詳細は「**花粉懸濁液の調整**」をご覧ください。

3. スプレーに移しかえ、受粉(散布)します。

➡ 詳細は「**受粉**」をご覧ください。

液体増量剤の作り方

準備するもの（1L作成する場合）

◆ 蒸留水（精製水） 1L

市販の水（ペットボトル入りミネラルウォーター等）も使用できます。ただし、硬度の高い水やpHが酸性やアルカリ性に偏った水は使用できません。

◆ 粉末タイプの寒天 1g

棒寒天も使用できますが、製品によってゼリー強度が異なるため、適正量を検討してから使用する必要があります。

◆ ショ糖 100g

上白糖やグラニュー糖など、できるだけ純度の高いものを使用して下さい。

◆ 食用色素（赤色102号） 0.1～0.2g

受粉の有無を識別するために添加します。入れなくても結実率に影響はありませんが、作業効率を高めるために添加することをお勧めします。ただし、入れすぎると花粉発芽を阻害するので注意してください。

作り方（1L作成する場合）

1. 粉末寒天1gに対し、約100mL蒸留水を加え、加熱します。

鍋で作る場合

① 金属イオンの溶出を避けるためホーロー鍋等に粉末寒天と蒸留水を入れ、焦げ付かないようにかき混ぜながら、中火で加熱します。

② 沸騰したら弱火にし、かき混ぜながら、寒天を完全に溶かします。

電子レンジで作る場合

① 大きめの耐熱容器に粉末寒天と蒸留水を入れ、食品用ラップフィルムで軽くフタをして、電子レンジで加熱します。

② 様子を見ながら加熱し、軽く沸騰してきたら止めて下さい。突沸してふきこぼれないよう十分に注意して下さい。

③ 軍手をして、容器ごと揺すってこぼさないように液を攪拌して下さい（やけどに注意）。

④ ②、③を繰り返して寒天を完全に溶かします。

2. 寒天が完全に溶けて溶液が透明になったら、残りの蒸留水を加えてかき混ぜ、1Lにします。

3. 食用色素を0.1g～0.2g加えます。

4. ショ糖100gを加えて、完全に溶かします。

◆ 室温になるまで冷ましてから使用して下さい。

◆ 保存する場合は、冷蔵庫に入れ、3日位で使い切ってください。なお、使用する際には、2～4時間位前に冷蔵庫から出して室温に戻して下さい。

◆ ショ糖を加える前であれば、煮沸消毒したビン等に入れて密封することにより一週間程度室温で保存することができます。この場合は使用前に規定量のショ糖を加えて、よく溶かして下さい。

花粉懸濁液の調整

○冷凍保存していた花粉を使用する場合は、12時間以上室温に放置してから使用して下さい。

○花粉は液体増量剤が室温になっていることを確認してから懸濁して下さい。液体増量剤の温度が高いと花粉が死滅する危険がありますし、低いと発芽が悪くなります。

○花粉の希釈倍率は、500倍以下(花粉量2g/L以上)が適当です(図1)が、花粉発芽率の差や、散布量の個人差を勘案すると300倍程度(3g/L)の希釈倍率でを使用することをお勧めします。

○1Lの花粉懸濁液を調整する場合は、はじめに少量の液体増量剤(30~50mL程度)に3gの精製花粉を加えてよく混和し、均一に懸濁したことを確認した後、残りの溶液(950~970mL)を加えてさらによく混和して下さい。

○花粉が液体増量剤に均一に混和されていることを確かめてから使用して下さい(花粉が‘だま’状になって見えますが、数分静置させればなくなります)。

○花粉は液体増量剤に懸濁すると時間の経過とともに発芽率が低下します(図2)ので、花粉混和後3時間程度を目安に使い切ってください。

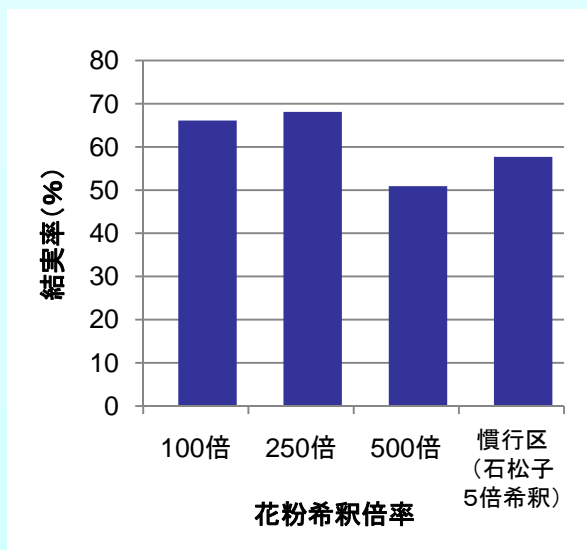


図1「幸水」における花粉の希釈倍率と結実率
(高知県農業技術センター果樹試験場 2004)
液体増量剤として寒天1%、シヨ糖20%を使用した場合

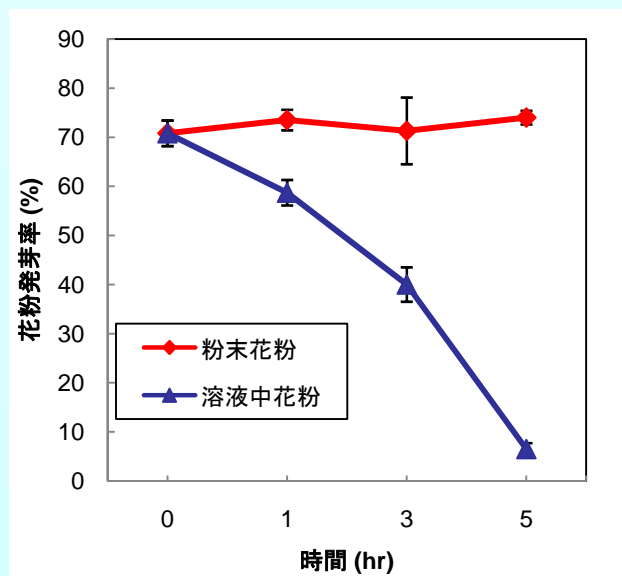


図2 溶液中の花粉発芽率の変化
(高知県農業技術センター果樹試験場 2004)

受粉

○ハンドスプレー等を用い、着果させたい花の中心をめがけて花粉懸濁液を噴霧します(写真3)。

○液体増量剤に食用色素を添加すると、受粉した花を容易に識別できますので、作業が効率的に進みます(写真4)。

○溶液受粉は梵天を利用する慣行の方法に比べ、作業時間を短縮できますが、無理に処理を急ぐようなことはせず、一つ一つの花に丁寧に受粉するよう心がけてください。

○年によって結実率は上下しますが、これまでの試験では、例年実用的なレベルの結実率が得られています(写真5、表2)。



写真3 受粉作業の様子



食用色素なし



食用色素あり

写真4 食用色素の添加による受粉の有無の識別



写真5 結実状態

表2 受粉方法が「幸水」の結実率、種子数および果実重に及ぼす影響(果樹研究所 2007)

受粉方法	結実率(%)	1果当たりの完全種子数	1果重(g)
溶液受粉 ^z	60.0	1.4	400.0
慣行受粉(石松子5倍希釈)	90.0	1.4	374.8
無受粉	6.0	0.0	229.0

^z寒天0.1%、シヨ糖10%、精製花粉0.3%.

[お問い合わせ先]

農業・食品産業技術総合研究機構 果樹研究所

阪本大輔・中村ゆり

電話029-838-6416(代表)